

もえぎ野文語教室作品集

(平成二十八年十一月十八日受附)

山本兼一著「利休にたづねよ・木守」

飯田美和子

茶の湯を習ひ始めてより五個月。茶事に關はるもの優美を大事とす。御點前の精細なる所作は、悉く美を求むる理に適ふを感じ得。この所茶の湯と文語とを學びをれば、再び「利休にたづねよ」を讀みて一部を文語にて書きたく覺ゆ。

徳川家康、利休屋敷四疊半、

天正十九年閏一月二十四日
利休切腹一月前朝

我を亡き者にせんとすや、家康大門

を仰ぎ見喉を撫でたり。風雅にして意志の強さを秘めたる二層の門なり。利休、家康を朝の茶に招きけり。家康出立せんとするに、宿借りたる茶屋四郎次郎「茶に毒盛らるやも、病と稱し行かぬが賢明と存じ候」。家康「左様な無茶は致すまじ」と。然れどその文言耳に張り付き、口中些か乾き粘り附く。(中略)

軒下の刀掛けに腰の大小を掛く。小さき潜り戸を兩の拳つきて、ぐつと躍り入る。床を背に坐す。張り詰めしもの一氣に溶け出づ。生死何の違ひかあらむと思惟す清幽なる茶の席なり。茶道口の襖開く。利休平伏し居る。「關東よりの長旅お疲れに候。本日は漸春めきて好日に存じ候。關白様より『存分の御持て成しせよ』との申付け給はり候。ゆるりと御寛ぎ下されたく候」。爐に炭を繼ぎ、螺鈿の香合より練香一つを炭の側に置く。熟れたる手の動作、身の動き些か銜ひもなく清涼なり。(中略)

利休赤き茶碗に濃茶を點つ。「茶碗の銘如何なるや」。利休「木守に御座候。秋、柿の實を收穫せるに次なる豊作を願ひて一つのみ残す實をば木守と申し候。長次郎作りたる茶碗を並べ、弟子達に好みたるもの選ばせるにこれ一つ残れり」。目利きの弟子達が選びて残りたる不出來な碗を「木守」と銘ず、利休の伶俐さに恐懼す。數多の大名、侍達より師と仰がる、天下一の茶人と稱せらる理あり。

家康、利休の點てたる薄茶を服す。淡き緑の泡細かく立ち、碗の内に沿ひて弓形の月形を残せり。ふと目を上げるや、利休、懷に何や隠したる氣配ある。「そは何物なるや」。家康、利休の懷に手をば入れ、取り出せるは眞つ赤きギヤマンの壺なり。「毒壺」「言ひ逃れは無用、毒壺にてあるらん」。利休「香合にて御座候」。蓋を開く。丸き練香出づ。一つ摘みて指先にて潰し粉になし口に含みて低頭す。甘き香り漂へり。家康、美しき壺より眼、離すこと不能。

高妻山に登る

飯田隆一

長野市の北西側には戸隠連峰が、またその北側には妙高連が廣がる。今より五百萬年前この邊りは日本海に繋がりたる海にてありとかや。その時代に噴出せる海底火山がやがて隆起に隆起を重ね戸隠連峰になりきと言はれたり。その中心なる戸隠山に一つの傳説あり。手力雄命が天の岩戸を開きその戸を空に投ぐるが葦原の中つ國に落ちて、山になりしが戸隠山なりといふ。戸隠奥社は手力雄命を祀り、中社は思兼命を祀り、日の御子社は天鈿女命を祀る孰れも天岩戸開きに參列の神々なり。(中略)

今夏友に誘はれ訪れたり。まづは高妻山を目指せり。この山日本百名山にその名を連ぬる故多くの登山者が豫想せらる。東京よりバスで到着せし戸隠キャンプ場は、盆休みにてオートキャンプの家族連れで賑はひ天幕設営の好場所を探すに時間を要しやうやう端の一隅に設営せり。翌日早朝に出發、牛を放牧せる牧場内を通るため靴裏を石灰粉で消毒し、登山開始す。澤沿ひに進み岩場をトラバースにて過ぎて一不動避難小屋に至る。二釋迦、三文珠と續き五地藏嶽にて小憩す。その後は激しき上り下りがあり最後の岩場を登りやうやう頂上に達す。空いと晴れ渡りて一點の雲もなく北アルプス連峰を存分に見續けたり。こゝは標高二千三百米を越えたる地故、平地より十五度低き温度なりしが陽ざしは強く岩陰にて晝食を取る。下山にかかり途中花を觀賞し、又岩場を觀察す。一度熔けて再度固まりし岩の中に角のとれたる石を見つれたり。昔こゝが海の中にありし證據なるらむ。かくして楽しき登山を終了せり。キャンプ場は昨日をしのぐ賑はひなり。夜半天幕より出づれば數多の人空を見上げをり。今しも流星群出現の時期なり。我も見上ぐればくつきりと天の川、しばし見てゐたりしが流星群は見えず再び就寢す。

六十年前六名でこの地の小さき山に登りしも二名が歸らぬ人となりき。地元の人に搜索の協力を要請する困難さに加へ、遺體收容、現地での通夜、茶毘を通じて山の厳しさを痛感せり。それにも況して駈けつけし親族の悲しむ姿を見るは斷腸の思ひなりけり。登山は絶対に事故なく安全に行動せねばならずと心に誓ひをり。

(平成二十八年九月)

猫の戀

埋橋勢津子

やはらかき風窗より入り來。草花の芽尖りて赤し。一面に伸び揃ひたる芝朝日に輝く。萌黄なす芝の上、黒き塊離れて二つ異様なり。眼凝らせば猫の「落しもの」に紛れなし。芝生大事と育て居る夫、これ見るや如何せむ。機嫌悪き顔思ひ浮びぬ。この事夫には語らず。腹立たしけれども我片附く。

我猫好きにはあらず。然はあれど我が家猫のたまり場となりつ。早朝の縁の下、何處より來るか數匹の猫ゐるらし。猫どもの呻き聲、掠れ聲、時に悲痛なる叫び。甲高き聲近所中に響くや。此は「猫の戀」とぞ思ひける。

曾て友より「猫の聲凄じ」と聞く。身體中に噛み傷負うて、血だらけとなるとかや。命がけの戦ひなるらん。傷嘗むるさま思ほゆ。芝生の上の「落しもの」斯くして戀に破れたる猫の仕業とこそ思ひけれ。

(平成二十八年卯月)

江戸箒

海野祐子

今の世、清めといふは掃除機なる道具用ゐるは然るべきなり。人手要らぬロボット掃除機まであり。かやうなる時世、我、昔がてらの長柄箒買ひ求む。埃や塵を拂はではと思へど、まことは清めを厭うてゐるばかり。家具やら小物しどけなく置きし我が住まひ、ロボットごときはたちまちに立ち往生せむ。體重十四キロの犬と住まふ故、朝に夕にその毛抜け落つ。板敷白き毛に覆はれ、絨緞に無數にへばりつく。如何な清め嫌ひも拂刷せざるを得ず。重さ五キロの掃除機を取出すは、一大覺悟を要す。まづは絨緞を清らにせむと中

腰にて押し引きすれば、汗しとどなり、直に腰痛みぬべし。音高らかなるが稜や小隅に埃薄く残るは忌々し。生温き排氣臭も憎し。雑巾がけの餘力疾く失せ果つ。

或る日テレビにて岩手縣の南部箒紹介しをり。(中略)眼見張りしは、かの箒用ゐて絨毯を軽く掃けば、しつかと塵の集りけること。正に目から鱗。試みに一本残りし安物の座敷箒使つてみるも、些かの毛も留らぬ。インターネットにて南部箒検索す。最高級品は五十萬圓もす。いとあさまし。そのなり、實に藝術品の如し。

東京京橋に「江戸箒」の老舗、天保年間創業の白木屋傳兵衛なる店あり。我が住まひ方の有様傳へしところ、草は外國産なれど、選別より仕上げまで、業熟練の職人の手になる箒勧めらる。直ちに買ひ求めたり。安うはあらねど南部箒が足元にも及ばず。重さはつかに五百グラム、軽さ危ぶむ。先づは絨緞をゆるう掃いてみる。出るは、出るは犬の毛と埃の量、思ひがけぬほど、立ち姿勢のまま、箒を力を入れず動かすは、腰にも優しき上、汗も出でず、しやらしやら立つ音もさらに小氣味良し。

掃除機なき時世には、母も祖母も箒用ゐ明け暮れ細やかに掃き清めし御蔭、家中に塵一つなかりけるを思ひ出す。箒は壁にひやうと掛け外す音もせねば如何なる時も心安く使ふべし。久々に箒手にせし我は、はからずも朝夕清め務めむ。然るを、暑き折から犬の毛更りとして、掃くほどに抜毛散り積るに、手拔もできぬは哀し。

本居宣長「須我笠の日記」を讀む

大野新一

文語の苑講演會にて旅日記とて一讀を勧められし中に本居宣長の菅笠日記あり。この小冊子、伊勢松坂より大和吉野への十日餘りの紀行文にして、思ひ起せば伊勢參りのをり宣長記念館にて求めつるあり。いま讀まむとして國土地理院地圖を併せみる。即ち宣長の歩きける道をつぶさに辿らむためなり。飛鳥、泊瀬、三輪、香具、畝火、甘南備、葛城、なつかしき地名、ゆかしき寺社名、溢れ出づ。里人に此處かしこ尋ね尋ね歩き、古事記に記されたる、又萬葉に詠まれたる事柄に思ひを廻らす。かつ論じ、まさに研究紀行なり。自らの歌も書き添へて數多なり。道端の龜石、酒船石とかやいふ巨石にも此處にあるは何故なるかを佇み思ふ。その姿目のあたりに浮ぶ。健脚・博學に何人か驚かざる。願はくはいつの日かこの冊子を携へてかの地を旅せむことを。

櫻によせて

高橋ちづ子

卯月の聲聞きし折、町田邊りより横濱かたに流れよる恩田川の川端に植うる櫻竝木を散策す。太き幹より枝垂るゝ枝には薄紅色に開花せる櫻の花は愛らしく、各々が纏まりをりて數多のまばゆき鞠をこしらへけり。待ちかぬる春の到來を我に語り告ぐる心地す。

川に目を注げば數羽の鴨、水すずやかなる流れに乗りてゆるゆると漂ひぬ。鶺鴒は川面を忙しく飛びかふ。時に春風のごとく音もなく何處かの樹を目指し、また矢刺すやうに水面に舞ひ降りぬる様、小さきながらいと頼もしげなる姿、目に焼き附く。

風に舞ひ落つる花びら水際に掻き浮きて花筏となれる姿、此も春ならではの風情なり。川の中ほどの堰より聞えしせせらぎもまた然なり。

空をみ上ぐれば久々に晴れ渡る碧空に心ひらく思ひす。惜しむらくは遠くに聳ゆる送電
鐵塔が一つ。あれを五重の塔と思ひいたさばとは家人の一言。さは言へどかの送電線は景
色はともあれ今や我等の朝夕の用に缺かさざるを得ぬものにて爲む方無し。

橋にさし懸かり川の上に立ちて右から左から咲き亂るる枝振りの花花を眺めつ。そゞろ
歩む人の顔、みなうらうらと長閑にてあんめり。そも我は向後幾度か花を愛づる折ありや
と問ふ。今や虚しき諍ひごと繁き世の中にて、この穩やかなる慣はしの、後の世にまで繼
がるればこの上なく嬉しとの懐ひを深めけり。

(平成二十八年春)